

第14回 まちだ未来の会学習会（町田の図書館活動をすすめる会と共催）記録

＜公共施設を考える＞その1

「私たちにとって図書館とは！」

日時：2018年6月30日（土） 午後1時30分から4時30分

場所：町田市立中央図書館 F6 大ホール

参加者：32名

1 あいさつ

まちだ未来の会（菌田）

公共施設の今後を考える各論として今回は図書館を取り上げ、「図書館活動をすすめる会」と共催してこれからの図書館のあり方について、皆さんと一緒に考え合いたい。

図書館活動をすすめる会（手嶋）

鶴川図書館、さるびあ図書館の存続を求める署名と請願で、町内会、自治会のみなさんのお力添えをいただいた。両館の集約化＝廃止をなんとしても阻止したい。

2 第1部 ビブリオバトル風＜本の紹介＞

（司会 守谷）近年、図書館は毎年20館くらいずつ増えているが、ほとんどが指定管理など業者委託であり、正規職員のいない図書館が増えている。それでも大きく立派で華やか建物に、市民の多くは良い感想を持っているのではないか。6月町田市議会では、ある議員より、「市の職員の中で、なぜ図書館職員だけ、おなじ職場の勤務が長いのか？」という質問があり、委託化の推進を求めるような発言もあった。こうした状況を踏まえ、図書館の在り方をもう1度考えてみたい。

① 「移動図書館ひまわり号」 前川恒雄著 筑摩書房 1988 （紹介者 守谷）

自身の人生をかえた本。市役所に就職し、資産税課から異動希望を出して図書館に移り、移動図書館を担当した。本書は日野市が1965年移動図書館ひまわり号1台からはじめ、わが国の公共図書館に革命をもたらした経緯が書かれている。涙が出るような心にしみるエピソードも多い。例えば、よく移動図書館に借りに来ていた女性が、突然カードを返しに来た。住込みのウエイトレスをしている人だったが、雇い主に「本読んだらあかん」といわれたので返しに来たと言う。こうした若者が学ぶことを妨害する大人や、図書館の発展を警戒する小権力者に対して、著者は憤りを隠さない。

② 「つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み」 猪谷千香著 筑摩書房

（紹介者 鈴木）1990年代の不況と2000年代から地方分権化がすすむとともに、指定管理者制度が導入される一方、貸出冊数増加を推進してきた図書館が“無料貸本屋”と言われたりするようになった中で、そこから脱却しようと試みる新しい図書館の歩みを追っている。例には武蔵野プレイス、千代田図書館などの指定管理者制度の図書館、島根海士(あま)町、小布施、伊万里等の市民と共に作った図書館が取り上げられ、改革には自治体の首長の強い意志と図書館長がラインに直結していることが肝心と著者は言う。いろいろな図書館を知る本である。

③ 「拝啓市長さま、こんな図書館つくみましょう」 アントネッラ・アンニョリ著

みすず書房 （紹介者 菌田）

イタリアの図書館アドバイザーの実践を踏まえた提言。“図書館あってこそその町”と説く著作3冊のアンソロジー。イタリアには500年前から図書館があるというもの、特殊な博物館のような存在で、近代的な公共図書館の出発は遅れていた。図書館を巡る危機は今や世界共通で、

ネットの情報と財政縮小に脅かされている。だが、ネットは検索の手段にすぎず、最後は書物に行き着いてこそ本物の知が成就する。本を巡って人が集まり、議論が起こり、お茶を飲み、ワークショップも開かれて新たな知が創造される。市長さん、お分かりでしょうか。

～質問～

○「移動図書館・・・」で、自身が感動したエピソードは？

A. 著者が市役所の職員の無理解に苦勞する場面など、私も図書館勤務の中で経験した。役所の他の部署の人とどう話せるか、館長にはそういう力が求められるが、著者は真摯に向き合っていた。この本が出て 30 年経っているが、まさに今読まれるべき本。

第2部 「私にとって 図書館とは？」

日野市立図書館 石嶋 日出男さん

1980 年図書館に入り、3 年前定年退職、いま再任用で働いている。

—ここで、日野市立図書館の移動図書館の歩みを描いた紙芝居『移動図書館ひまわり号』上演—
現在、日野の図書館でも問題をかかえている。図書館法が改悪され、国庫補助を受ける館長の有資格要件がなくなった際、日野でもそれに従って条例改正がなされようとしたとき、利用者の方々が市長に直談判し、なんとか全額削除は免れた。総館長、分館長、専門職員、図書館員への信頼感が失われつつあったのか、問題に対する図書館内の反応が鈍い。2005 年に分館の窓口委託の話が出た。開設 40 年経ち、草創期の理念がうすれてきたのではないかと思う。学校給食が業者委託される中、図書館の業者委託は阻止できたが、職員は大幅に削減された。行財政改革が、図書館サービスの混乱を招いている。

こうした時期に大幅改修してできた日野分館も変革を求められていた。職員は、利用者をカウンターで待つだけでなく、地域へ出ていくべきだという館長の考えから、「日野宿発見隊」が発足。数名からはじまって、小中学校、商店会とタイアップし展開してきた。生き物観察や、記録集の発行、手作り大型はんこを集めるスタンプラリーなど行う。地域の半世紀写真集は、図書館員が担当し、写真を集めるなかで地域の人々との触れ合いが生まれ、図書館資料として受け入れもできた。地元の姿を後世に残したいと協力してくれた方が、その仕事をする中でそれまで苦しんでいた鬱から回復された。日野用水については、町の宝物でありながら 30 年前暗渠化されていた。改修に当たって事前説明とはかけ離れた工事であったため住民と話し合いが持たれ、一部変更された。このことも、行政サービスの第一線にある図書館だからこそできた。委託ならできなかった。

また、近隣の学校や商店会や自治会などの協力をえて、「ひのっ子日野宿発見」というこども向けの郷土を調べる絵本を作った。参加した小学生のなかには「大きくなったら図書館長になる」という子もいる。14 年間同じ職場にいたので、赤ちゃんだった子は中学生になり、高齢者も見送ってきた。さまざまな出会いがあった。築 50 年の建物はとうとう空調設備がダウンし、石油ストーブでしのぐ時期もあった。施設面でハンディもあるが、毎年 25 万冊の本の貸し出しを続けている。「図書館が言うんだったら協力してやるよ」と言ってくれる人もおり、行政からの存在の中立性、独立性を認めてもらえていると感じる。日野でも、図書館の運営方法の見直しが進められているが、3 月に「第 3 次日野市立図書館基本計画」が策定され、これが今後どう実現するかが問われている。

～質問～

○資料提供を任ずる図書館が、地域に出ていくことになった経緯は？

A. 2005 年日野宿の町並み再生プロジェクトが進むなか、図書館として何もできていなかった。地域館としてプランニング段階での資料提供のしくみ作りを考えるようになった。

○普通は博物館がやることを、図書館でよくできたと思うが。

A. 当時、市は新選組を観光の”売り”にして博物館を首長部局に組織替えし、名称をかえた郷土資料館を別のところに開設した。そんなこともあり地域図書館として地域資料に目を向けることも大事な役目のひとつだと考えて、日野宿発見隊事業に取り組んだ。

○自治体や学校とコンタクトをとるのは難しいのではないか。

A. 近隣の校長先生との出会いがあった。日野宿発見隊の活動を理解してくれ、退職後は3代目の代表を務めてくれている。郷土資料館や公民館とのタイアップも大きかった。

休憩・・・14：50より再開。

「私にとって 図書館とは? —市民として」

1. 「中央図書館の利用者として」 土屋利之さん (原町田4丁目町内会)

原町田4丁目町内会は文学館存続を求める請願を出した。私は昭和12年生まれ。名古屋で育ち、戦後の焼け跡に丸善だけが残っていたので、父に通信簿が出ると、ご褒美に本を10冊も買ってもらったのが楽しい思い出。その後新潟の小学校に転校したが、中学では本が好きですぐ図書委員に立候補した。高校時代は近隣の県立図書館。大学時代は研究室の書棚の本を読み漁った。会社員になってからは日比谷図書館や神田まちかど図書館、小石川の文京区図書館を利用。社内に読書クラブを作って回し読みをしたりした。昭和59年に町田に転居してからは、さるびあ図書館を利用し、中央図書館ができた時には、休憩や喫茶スペースがあるのを便利だと思った。今も月に10冊程度小説を除き、幅広いジャンルの図書を借りている。新刊書で予約が多い本は諦めて、しばらくしてからもっぱらブックオフで買っている。中央図書館で不満なのは、おしゃべりする場所がないこと。レーザーディスクは館内視聴だけで貸し出しがないこと。提案したいことは、文学賞などの受賞作は、3か月くらい貸し出さず、館内で見えるようにしたらどうか?

図書館の住み分けがあってもいいのではないかと。たとえば、中央図書館は資料中心、かつ、ない本については近隣の市の図書館とやりとりをする。地域館は、雑誌や新刊本を置き、座るスペースを設け、楽しめるようにするとか。町田は立派な本屋がない。アマゾンが便利だったり、本屋がなりたたないのではないだろうか。図書館は資料の収集もさることながら、最近の市民のニーズを考えると、サードスペースとしての機能は大切な条件だと思う。私にとって、図書館はサードスペースとしても大事で、生涯大切にしたい施設である。

2. 「地域図書館の利用者として」 郡 真帆子さん (鶴川地区在住)

先日行われた「鶴川地域図書館のこれから」というワークショップに参加したのが機縁で今日の学習会に呼ばれた。大阪出身で、田無、杉並、町田と引っ越ししてきたが、いつも不動産屋の情報で図書館まで何分かが重要な決め手になっている。町田も鶴川図書館があるので鶴川に決めた。鶴川図書館は小学生になった長男は一人で行くことができ、また子どもたちが本に飽きたら広場で遊ばせたりすることもできる。家族4人で利用しており、道筋から途中公園で遊んで、図書館へ行くこともできる。リクエストが便利。小学校で読み聞かせのボランティアをしてよく借りる大型絵本は、子連れ、荷物持ちで駅前図書館から運ぶのは大変。イベントのついでや書棚を見て選びたいときは駅前図書館を使うなど、二つの館を使い分けている。夫は、全部セルフでできる駅前図書館をメインに使っている。今、(図書館が入っている)団地商店街の建て替えが予定されたり、安心ステーションで高齢者の移動を手伝う活動が始まったりして、なんとかタイアップしていければいい。駅前図書館は夏休みに科学実験などのイベントをしてくれるのは読書へのきっかけとし

てありがたい。施設再編は利便性をメインに。分散化をメインにしてほしい。子どもたちは紙で調べることが大事で、調べ学習に子どもセンターのつるっこと連携できないか。駅前図書館はカウンター席が狭くて調べものには不適。司書さんには、もっと表に出てきて専門性を発揮してほしい。

3. 「図書館建築の設計者として」 大字根 弘司さん (旭町在住)

(司会より紹介：文学館、国際版画美術館、ひなた村など市内の建築設計をてがけるほか、山梨など全国で美術館、文学館、図書館等の設計を展開中である。)

図書館関係の人は、図書館は資料提供がメインと言うが、設計者は、来て気持ちいい図書館をメインに考え、お茶を飲むところをどうするか、読書室はどうするか、天井は？壁は？と考える。いま話題になっている図書館のいくつかに行ってみた。

・志木市遊学館 (学校・公民館・図書館の複合施設)

建築としてみると、入口がわかりにくい。入ったらすぐに本棚が並ぶ。居心地の良さを感じない。学校の教室との間の寒さ除けをビニールシートでしのいでいた。新築してそれほど経っていないのに汚れが見え、材料・ディテールに問題があるのでは？また、ガラスが多用され、シングルガラスなので、冷暖房費維持費が大変だろう。

・武蔵野プレイス

入ったところの一番いいところにカフェで、脇に自動貸出機、2階は子ども、地下に大人用の本と、前後逆なんじゃないか？しかし、心地いい空間で照明もいい。大勢の人が使っている。材料はどうか？かなりセミナーの部屋は透明性が高く、中でやっているところが見える。満室。

・太田市美術館図書館

四角いボックス形。魅力的な建築ではあったが、図書館としては？。四角の美術館機能のまわりを斜路で登ってゆく構成になっていて、その斜路の部分が図書館になっていて、階段にも書架、天井までの高い書架、どう管理するのか？ 天井のガラス張りは暑いのではないかな？

・大和市 シリウス

機能の違うものが各階に混在している。1階は喫茶室と図書館機能が混在し、コントロールはどうしているのか？

・海老名市立図書館

1階に書店が入って、上に図書館。建築はいい。が図書館としてはどうか。

・岐阜 メディアコスモス

真四角でペアガラスが囲む。1Fお茶スペースもある広場、2F図書館機能。3×15cmのヒノキをはりあわせたシェル構造。いい空間。展示室、おはなしスペース等、6つ位ロートをひっくり返した形の半透明スペース。にぎわっていた。問題は、大きい建築で、朝日夕日がまともに入り、ふせぐカーテンが巻き上げ式で、大変な負荷。冷暖房費大。むずかしい構造のため雨漏りの心配も。近くにある県立図書館のほうは、つまらない建物で、ほんの2、3人しかいなかった。以上、建築家はつい勇み足になり、怒られるものである。

4. 意見交換「町田の図書館、これまで！そしてこれから！」

(司会) 意見交換をするにあたって、次のようなテーマで話し合ってみてはどうか。

- ① お金がない中で、図書館は個々に資料を特化したらどうかという問題
- ② 資料提供は図書館の基本であるが、それと市民の求めているもの(建築空間としての気持ち良さの重視、多様なイベント開催など)をどう考えるかということ。
- ③ ブックオフ、アマゾン、ネットがあるなかで図書館の存在意義は？

(Hさん・多摩市在住)

多摩市はいま中央図書館を建てるところである。図書館はそれぞれ特徴があつていい。私は稲城をよく使う。効率よく近隣5市くらいで融通して、アマゾンのようにスピーディになるとよい。図書館の役割ってなんだろう？学習室提供？リビングルーム？それともオフィス？

(手嶋)

資料の特化には異論がある。各図書館が金太郎あめのようにあらゆる分野の資料をまんべんなく網羅的に揃えるのが望ましい。中央図書館は多少町田の地域資料に特化するのはいいと思う。

図書館の役割では、かつて中央図書館の設計に関わって自習室について議論し、38席作った。席は本来図書館資料を使って調べ学ぶ場だが妥協した。5Fのレファレンスコーナーが学生たちの自習の場にされていて社会人が使えなくなっていたので、社会人席を作った。

(Iさん はじめて参加)

稲城市の市立中学校で国語の教師をしていて、NIE（新聞で学ぶ教育）を実践。退職後、自宅に10畳ほどの図書室を作り、木で囲まれた、子どもたちの逃げ場にもなる空間で活字文化を生かしていく手助けをしていきたいと思っている。

(石嶋さん)

日野市の中央図書館を作った時は、2Fレファレンススペースは調べものをする人だけにしていたが、目的が浸透せず、ただ時間制限を設けて使うようになった。分館は調べものをするスペースはかなり狭い。質問してくれる人と職員が接点を持っていきたい。

(守谷)

公共図書館の役割は、全てのジャンルに選ばれた一定の本がある場であること。それを満たした上での特化ならいい。議員や他部署の職員のなかには、財政難なんだから、何も同じ本を複数買う必要はない、館同士で融通すればいいじゃないかと言う人もいるが、図書館の棚を見て未知の本と出会うことが図書館の大きな魅力だし、場としての図書館が持つ意義でもある。しかし、それともまるところ資料費だ。以前年間資料費が1億円だったがいま4割になって、複本はほとんど買えない。

(土屋さん)

さっき特化していいといったのは、資料を網羅したうえでの話。雑誌は融通してもいいが、資料はしっかり網羅すべきである。

(手嶋)

以前、クローズアップ現代という番組で、町田の図書館は売れ筋本しか置いてないと報道され、反論した経緯を図書館のHPに載せているのでご覧いただきたい。

(郡さん)

こどもは情報を手元で消費しているように思える。あっちいたりこっちいたりして発見する場として図書館を残してほしい。プラスαとしての特化ならいい。受験勉強しかしていない学生に、図書館の資料提供を使いこなせるようにするために司書さんに出てきてほしい。いま図書館に来ていない人にどう足を運んでもらうか。イベントもその入り口。

(Oさん 史考会)

今月亡くなられた先輩はかつてレファレンスで守谷さんにお世話になったと言っていた。現在は月2回読書会を行っている。図書館まつりに3回参加してイベントをしているが、小中高生は来ない。幼児が親に連れられて来るくらい。小中高生は単独行動をしなくなっている。忙しい先生に変わる引率の人がいればいいのかと思う。

(Bさん 忠生図書館員)

格差社会の今、貧しい子も利用できる図書館は必要。平田オリザの「新しい広場をつくる」という講演を聞いて、公共施設を中心に本物の体験をさせる大切さに共感した。

(Oさん 相模原市在住)

通勤途中にまちだの図書館は利用しやすくよく行く。学習室は自習の場ではないというのは正論だが、斎藤孝は著書で、「公共の場が一番勉強がはかどる」と述べている。図書館に望みたいのは、相互利用協定では他市の人は予約ができないということだが、なんとかしてほしい。

(手嶋)

町田市民優先ということからできないシステムになっている。相互利用については、予約・リクエストとも認めていないが、他市の対応はいろいろ。私も在勤であるが他市に住んでいるので予約はできてもリクエストはできない。

(守谷)

以前私が担当していた頃、相模原の人が町田を利用するほうの割合が多く、町田の人が相模原を利用する人数と比べると10:1位だった。

(Hさん)

図書館は恵まれない人も誰もが行ける場所、これから資料提供をするだけでいいのか？コミュニケーションの場を市民は求める。本よりも人を主体にした場を。新しい建築に期待したい。中高生、サラリーマンの足は図書館には向かず、予約もネットでするのが7~8割。ネットの有効性を使いつつ図書館と共存する模索を。図書館に特徴を。

(Cさん)

特化されては、市民としては困る。広く浅くでもいいから本が揃い、近くにあることが必要。居場所であっていい。100%資料を満たさなくてもいい。

(山口)

郡さんが言われた分散化が印象に残った。図書館が生活動線上にあることが大切。よって集約より身近にあるべき。また学校図書館を利用することで子どもたちは図書館の使い方を学び、生涯にわたって図書館を使える市民となる。そのためにも公共図書館は身近になければならない。また図書館が「気持ちのいい空間」であれば、それを目的に来た人が、図書や各種情報に触れることで図書館を利活用することも期待できるのではないか。

(大字根)

建築をやるものには、「気持ちのいい居場所でありたい」という意見を聞いて感動した。

(Wさん 市議会議員)

市議会で0議員が発言したこと（なぜ図書館職員だけ在职年数が長期なのか）に、きちんと反論がなかったことが残念だった。

(守谷)

長くいる司書しかできない仕事がたくさんある。いくつかの分野に関連した本を、どこの棚に分類・配架するか、また館にどんな資料があるかも大筋頭に肺いていないと案内できない。利用者が何を求めているかを把握するためのレファレンス・インタビューなど。

次回は、7月21日（土）午後 文学館をテーマに、文学館の第6会議室でおこなうので、ご参加を。

（記録：庄司）